土木用語あれこれ 8

へ　ど　ろ

井口昌平

何年かまえに田子の浦港の事件が起こったときに，「へどろ」という語が土木の世界から一般社会に初めて顔を出す光栄に浴したのではないかと思う．そのころ，「ヘドロ」とカタカナ書きにされたこともあって，新聞記者などに「それは英語ですか」などと尋ねられるということもあった．それも無理ではないわけで，例えば代表的な辞典の一つである新村の『広辞苑』にも「へどろ」という見出し語はない．しかし，土になじみ，あるいは土を相手にする人びとの間では，古くからこの語が用いられていたのではないだろうか．ただし，それはもっぱら話しことばとして生きてきたので，書きことばによりどころを求める辞書の編集者に見のがされていたのではないか，と思う．

そうは言っても，「へどろ」は何となく，とらえどころのない響きをもつところが気にかかる．その中の「どろ」の部分は「水がまじってやわらかくなった土」（広辞苑）という意味のものだということにはほぼ確信がもてる．問題は「へ」の部分だ，ということになる．ところで，同じ「どろ」にかかわって「へな土」および「へな」という語がある．それらは同義語であって，「へな」に対して，『広辞苑』は，「埴土」および「粘土」という漢字をあて，また「黒くてねばりけのある水底の粘土．荒壁に塗るもの．ねんど．へなつち」と解説している．

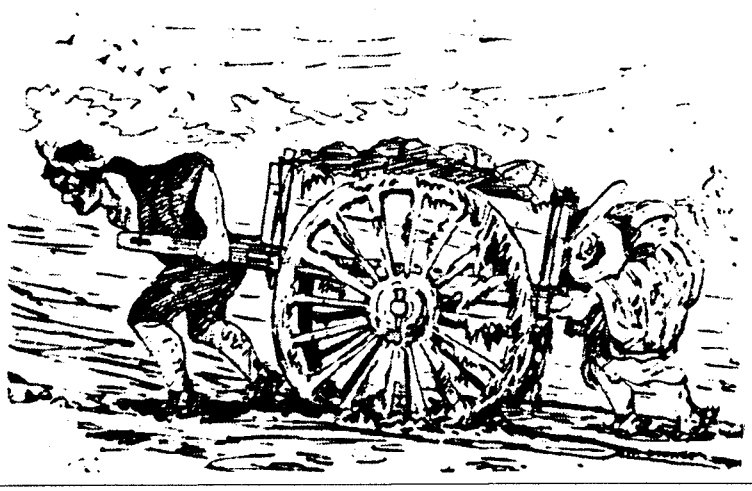
そうなると，「へどろ」と「へな」とはごく近いものらしく見えてくる．しかし，今度は「へな」の「な」を追求しなければならない．古い用語で「なづき」とか「なづみ」という同義語がある．ことに，「なづみ」は漢字をあてて「泥み」とすることがあるように，これらは「どろ」にかかわる．また，「なづき田」は「水に漬かっている田」を意味するし，「なづみ」は「水・雪・草などに足腰を取られて，先へ進むのに難渋する意」（岩波古語辞典）とされる．このように見れば，「な」は「水まみれの土，どろ，あるいは水そのもの」をさすらしく見えてくる．そして，最近の学説には，「な」は南島諸語の水をあらわす語と同根であろう，と推定するものが出ている（村山七郎：日本語の語源）．

しかし，そのような意味を負わせた「な」という語は，現代ではほとんど死語になっているし，「へな」が「へなつち」という形でかろうじて息づいているようなところで，一方で「どろ」のほうは室町ないし江戸時代の生まれで現に生き続けている．そこで，「へな」が，かなり近い時代に「へどろ」に変化した，という推定が成り立つのではないか．そうであれば，「へ」の部分が問題だ，とした設問は立ち消えになる．「へ」はもともととらえにくい（それについて，有名などどいつがあったようだ）．

語源にさかのぼり続けるのよりも，別の面を強調するほうが『土木学会誌』の上ではふさわしい，と思う．「へどろ」は土になじむ人びとの間から生まれた語なのに，それが話しことばであり，あるいは一種のいやしい語であるように，使っている当人たちが思っていたために，それらの人びと――つまり土木技術者――が，文章を書くときには用いなかったり，仲間でない人には聞かせもしなかった，のではなかったか，ということが問題になろう．

なお，念のために増田綱氏の『新和英大辞典』の第4版（研究社，1974年）を見ると，「ヘドロ」という見出し語が出ていて，≪sludge≫が与えられている．これは全く適切であろう．

（筆者・正会員　工博　東京大学教授　生産技術研究所）



（長原止水・画）